

『自由意志について』

ロレンツォ・ヴァッラ 著

佐藤三夫 訳

レリーダの司教ガルシアに宛てて、 自由意志について

司教たちの中で最も学識があり最も善良なる方ガルシア殿¹⁾、他のキリスト教徒たちと同様にまた神学者と呼ばれる人々が、哲学をさほど重んじないこと、哲学にさほど労苦を費やさないこと、そして哲学を神学の保護者とは言わないとしても、神学とほぼ等しいものだとか神学の姉妹だとかにしないことこそは、わたしが最も望みこの上なく願うところである。実際、もしかれらが神学は哲学の保護を必要とするとみなすならば、かれらはわれわれの宗教について誤った意見をもっているようにわたしには思われる。その著作がすでに多くの世紀にわたって存続している使徒たちの模倣者にして神の神殿の真の柱石である人々は、いささかもそのようなことをしなかった。そして実際、もしわれわれがよく注意して見るならば、その時代にあった異端は——そしてそれは十分數多くあったとわれわれは認めるのであるが——、ほとんどみな哲学的教義の源から生まれたものである。哲学は至聖なる宗教に役立たぬばかりでなく、またきわめて重大な害をあたえるという仕方で、そうなのである。ところがわたしの話している人人は、哲学は異端を根絶するために生まれたのだと言いふらしているが、むしろそれは異端の

苗床なのである。異端を征服するために哲学の武器をもつことなく、しばしば哲学そのものに対して非常に激しく戦い、タルクイニウスのように哲学を追放に追いやって帰ることを許さなかった、きわめて敬虔な古代の人々を、無知だと非難していることをかれらは自覚しないのである。そのようにこれらの古代の人々は無知であって、しかも非武装であったのだろうか。それならどうしてかれらは世界の多くをかれらの支配下に帰せしめたのか。それに反しあなた方は、このような武装をほどこされていながら、かれらがあなた方にほとんど遺産として残したものを、まったく守ることができないでいる。ああ、何と卑しい悲しむべきことか。それゆえ、なぜ祖先の跡に従って行こうと望まないのか。かれらの理性ではないとしても、少なくともかれらの權威や成果が、新しい道に歩み入るよりもむしろ、かれらを模倣するようにあなた方を導くべきであった。慣用によってすでに証明済みの薬剤でもって患者を治療しようと望まないで、まだ試験されていない新しい薬剤で治療しようとする医者や、わたしは憎むべき呪うべき者だと思う。他の船乗りたちが船も船荷も安全に運んだ航路よりも、変わった航路の方を好む船乗りもまた、そのような者だと思う。同様にあなた方は、もし哲学の諸規則を守らず、それらをきわめて勤勉に習得しなかったならば、だれも神学者とはなりえないと思うほどの異常さに達したのだ。また同時にあなた方は、以前においてこれらの規則を知らなかったか、あるいは知らないことを望んだ人々を、愚か者とみなす。

1) ガルシア・アスナレス・デ・アニョンは、1435年から1449年まで、レリーダの司教であった。ヴァッラは1435年と43年との間、ガエタにおいてアルフォンソの秘書であった。この対話はこの時期に位置を占めるべきである。——ガレンの注。

おお時代よ、おお慣習よ。かつてローマの元老院のもとでは、外国語で話をするのは市民にも外国人にも許されず、ただその都市の方言でだけ話すことが許された。だがほとんどキリスト教国の元老院議員たちであるあなた方は、教会的な話よりも異教的な話を聞いたり述べたりすることの方を喜んでゐる。しかし他の人々に反対して語る機会は多くの場所においてあたえられるであろう。今はさしあたりポエティウスが、ただあまりに哲学を愛する者であったがゆえにのみ、『哲学の慰めについて』の第5巻において、自由意志についてなすべきであったような仕方で論じなかったということ、われわれは示したいと思う。

最初の4巻に対しては、『真の善について』De vero bono²⁾というわれわれの著作の中で答えた。多くの著述家たちの後に、わたしがそれについて論じたが無益であったと思われなために、わたしはこの問題をできる限り一所懸命に議論し解決するように努めるであろう。実際わたしは、わたし自身のもの³⁾、そして他の人々のとは異なったものをもたらずであろう。わたしは自分の意志でそうする気持であったのだが、最近アントニオ・グラレア⁴⁾ともった討論によって、さらにいっそう駆り立てられた。かれは非常に学識のあるかなり鋭い人士であり、またかれの習性によってと同様に、かれがサン・ロレンツォの同郷人であるゆえに、わたしにとってはたいそう親しい人である。わたしはその討論の言葉をこの小著の中に、あたかも物事が物語られるようにではなく、現に行われているかのように表明しながら、述べた。それというのも、「わたしは言う」とか「かれは言う」ということをしばしばくり返さないようにするためである。不滅の才能の人士マルクス・トゥ

ッリウスが『ラエリウス』と題された本の中で、なぜそうしたと言ったのか、わたしには分からない。なぜなら、著者が自ら議論したことではなくして、他の人々によって論じられたことを物語る時、どのようにして「わたしは言う」ということを差しはさむことができるのか。キケロの『ラエリウス』における場合がそのようである。その本の中には、ラエリウスがその二人の婿ガイウス・ファンニウスとクイントゥス・スカエヴォラと行った討論が含まれている。それはスカエヴォラ自身によって述べられ、いく人かの者たちといっしょにキケロによって聞かれた。キケロはその若年のゆえに、スカエヴォラとあえて議論したり談論したりすることをほとんどしなかった。スカエヴォラはその年齢とその威厳へのある尊敬の念をあつちの者に抱かしたのだ。だがわれわれの主題にもどろう。そこでアントニオは正午にわたしのところへやって来て、わたしが別段忙しくもなくいく人かの家の者たちと広間に坐っているのを見つけて、その話題やその折にふさわしい前置きとなる前口上のような言葉をいくらか述べた後、次のようにつづけて言った。

アントニオ 自由意思の問題はわたしには非常に難しくきわめて難儀なことと思われる。あらゆる人間の行動、あらゆる正邪、あらゆる賞罰はそれに依存しており、しかもただこの世においてのみでなく、また来世においてもそうである。そしてどんな問題がもっとよく知られることが必要なのか、あるいはもっと知られることがないのか、わたしには言うのが容易でない。実際、わたしはしばしばわたし自身で、またしばしば他の人々といっしょに、その問題について探求するのをつねとしているのだが、今なおこのあいまいさから脱け出るいかなる道をも発見することができないでいる。そのためにわたしはたびたび混乱させられ、また自分自身の中で狼狽させられるほどである。それにもかかわらず、わたしは、そのことのために探求するのがいやになったり、それが認識されうることに絶望したりすることは決してないだろう、多く

2) De voluptate ac vero bono libri tres (Basel, 1519).

3) 「わたし自身のもの」とは、明らかに、神の予知と神的意志との働きの間のヴァッラの区別である。——トリンカウスの注。

4) グラレアは、聖ロレンツォの故国と推定されるアラゴンのウェスカの生まれであったかもしれない。——ガレンの注。

の人々がこれと同じ希望を抱いて裏切られたことを知ってはいるけれども。それゆえわたしはこの問題について、また君の意見をも聞いてみたいのだ。すべてを探求し調査することによって多分わたしが探しているものに到達せんがためのみならず、また君がどれほど鋭く正確な判断力の持主かをよく知るためにも。

ロレンツォ 君の言うように、その問題は非常に難しく難儀なものであり、誰かによって知られるかどうかわたしにはまったく分からない。だがそれが決して知られないとしても、そのために君が混乱したり狼狽したりすべき理由はない。実際、誰によっても到達されなかったことが見られることに、君が到達しないからといって腹を立てることは、正しいのだろうか。しかもわれわれのもっていないもので他の人々のもとにあるものが沢山ある。だからと言ってわれわれは心を痛めるべきではなくして、平静に耐えるべきである。ある者は高貴さを所有し、他の者は官職を、他の者は富を、他の者は才能を、他の者は雄弁を、他の者はそれらの多くを、他の者はそれらすべてを所有している。しかしながら、物事を公正に評価し、自分の勤勉さを自覚している者は、かれら自身がそれらのものをもっていないからといって、嘆き悲しむべきだとはみなさなかつた。さらに、誰ももっていない鳥の翼がないからといってさほど嘆くべきではないであろう。実際、もしわれわれが自分の知らないすべてのことのために悩みを招くとしたならば、われわれは人生をわれわれ自身にとって厳しくつらいものとすることになるだろう。われわれに知られないもの、そのように神的で超自然的なもののみならず、また人間的な、そしてわれわれに知られうるものがどれ位あるか、君は数え上げて欲しいのか。手短かに言うならば、知られないものの方が、知られるものよりもはるかに多いのだ。そうしたことからアカデミア派の人々は、かれらもまた間違っているとしても、われわれにとって十分に知られるものは何もないと言ったのだ⁵⁾。

5) この謙虚の勧告と、アントニオが知識の翼に対する願

アントニオ なるほど君の言うことは本当だと認める。だがどうしてか分からないが、わたしは心の衝動を抑えることができないほど我慢できず渴望している。実際、鳥の翼について、それをわたしがもっていないとしても悲しむべきではないと君が言ったことは、わたしも認める。だがそれにもかかわらず、ダイダロスの例のように、もしそれを獲得することができたとしたら、なぜわたしは翼を拒まねばならないのだろうか。しかも今は、どれほどもっと優れた翼をわたしは熱望していることか。その翼によってわたしは壁に囲まれた牢獄からではなくして誤謬の牢獄から飛び去れるように。そしてダイダロスがしたようにこの体を生んだ故国にではなくして、魂がそこで生まれる故国に飛んで行って到り着けるように。アカデミア派の人々の方は、かれらの信念とともに放っておこう。かれらはすべてのものを疑いに置いたにもかかわらず、それらを疑うことは確かに疑わなかつた。かれらは何ものも知られないと主張したけれども、探求の努力をなおざりにしなかつた⁶⁾。さらに、その後の人々が以前に発見されていた事柄に多くのものをつけ加えたことを、われわれは知っている。かれらの模範と教えはまた他のものを発見するようにわれわれを鼓舞するはずである。それゆえ、もしことによって君が——わたしの望み求めているように——わたしの渴望を満足させてくれるのでないならば、お願いだからこの心配や悩みをわたしから取り去ろうなどと望まないでくれたまえ。なぜなら、悩みを取り去ったならば、君は同時に探求への心づかいをも取り去ることになるだろうから。

ロレンツォ 他の誰もができなかつたことを、わたしが満足させて上げることができようか。

いを表明し、未知なものの追求の刺激的な結果を賞讃する次の文章とは、新しい特質と古い特質とを象徴している。しかしながらヴァッラは、『人間の尊厳』に関するピーコと対照的に、かれ自身の主張と、またかれの問題へのあらゆる可能な解決へのアントニオの不信との両方において、決定的に保守的な側に立っているように思われる。——トリンカウスの注。

6) Cfr. Augustini *Contra Academicos*, III, capp. 7-9; Lactantii *De divina Institutione*, III, 6. ——ラデッティの注。

書物についてはいったい何と言うべきだろう。もし君が書物でもって安らうとすれば、それ以上探し求めるべきことは何もないし、またもし書物でもって安らわないとすれば、わたしがそれ以上良く言うことのできることは何もない。しかしながら、あらゆる書物に、しかもきわめて推賞されている書物にさえも宣戦を布告し、それらのいかなるものにも味方しないことが、どれほど神聖なまたどれほど我慢のできるものであるのか、君には分かっているのだろう。

アントニオ 長く用いられることによってすでに吟味された書物に賛成しないことは、我慢のならない、ほとんど瀆聖なことと思われることを、わたしはもちろん知っている。だがきわめて多くの事柄において、それらの本が互いに不一致であって、異なった意見を擁護するのがつねであり、しかもかれらの言説が問題に付されないほどその権威が大きい人はきわめて少ないことを、君が気づかないはずがない。実際、他の事柄においては、わたしは著作家たちを必ずしも拒まない、ある時はこの著作家が、またある時はあの著作家がより本当らしいことを言うこととみなしながら。だがわたしが、君や他の人々のお許しをえて、君といっしょにそれについて話そうとしているこのことにおいては、わたしは誰にも絶対に賛成しない。なぜなら、この問題の説明においてみんなから名誉があたえられているポエティウス自身が、企てたことをなし遂げることができないで、ある想像上の虚構の事柄に逃げこんでいる時に、他の人々については何と言ったらよいのか。実際、かれの言うところによると、神は理性を超えた英知を通じて、すべてのものを永遠に知り、またすべてのものを現在のものとして保持する⁷⁾。だが理性的であって時間の外では何も認識しないわたしは、英知と永遠の認識を切望することができるのか。かれの言ったことが本当であるとしても——わたしはそのことを信じないが——、ポエティウス自身そうしたことを理解しなかったのではな

いかとわたしは疑う。なぜなら、その話がかれ自身によっても他の人によっても理解されない人が、真なることを語っているとはみなされえないから。このようにしてかれは、この議論を正しく提起したとしても、それを正しく遂行しなかった。このことに関して、もし君がわたしと同意見であるならば、わたしは自分の意見に喜ぶだろう。だがもしそうでなければ、ポエティウスが漠然と語ったことを君がいつそう明白に語ることは、その教養のために君にとって重荷ではないだろう。何れの仕方にせよ、君はわたしに君の意見を打ち明けるだろう。

ロレンツォ かれを非とするにせよ、かれを訂正するにせよ、ポエティウスを侮辱することをわたしに命じる君は、どれほど公正な要求をしているのか見てみたまえ。

アントニオ 他人について真なる意見を述べることは、あるいはかれが漠然と語ったことをより明瞭に説明することを、君は侮辱と呼ぶのか。

ロレンツォ けれど偉大な人物に関してこうしたことをするのは、いやなことだ。

アントニオ 道に迷った者に道を示さないことは、しかも道を示すことを懇願している者に示さないことは、確かにもっといやなことだ。

ロレンツォ もしわたしが道を知らないとするればどうなるのか。

アントニオ 「わたしは道を知らない」と言うことは、道を示すことを望まない者の言い草だ。それゆえ、君の判断を打ち明けることを拒もうと欲するな。

ロレンツォ もしわたしがポエティウスについて君と同じ意見であり、君と同様にかれを理解しないし、さらにわたしはこの問題を説明するものを何ももっていないと言うとすれば、どうなるのか。

アントニオ もし君が本当にそうしたことを言っているのなら、わたしは君があたえうる以上のことを君から得ようと求めるほど愚かではない。だがわたしに対していやな奴でうそつきを装うことによって、君は友人の義務をほとんど果たさないことにならないよう用心したまえ。

7) Cfr. *Antidota in Poggium*, IV, p. 343. — トリカウスの注。

ロレンツォ どのようなことを君に説明することを君は要求するのか。

アントニオ 神の予知は自由意志に対立するかどうか、またこの問題についてボエティウスは正しく論じたかどうか。

ロレンツォ ボエティウスについては後にわたしは見るだろう。だがもしわたしがこのことに関して君を満足させるならば、わたしは君が約束することを望む。

アントニオ いったいどんな約束を。

ロレンツォ もしわたしがこの昼食において君を豪勢にもてなすとすれば、君は夕食においてふたたびもてなされようと望まないという約束をだ。

アントニオ どんな昼食のことを、またどんな夕食のことを君はわたしに言っているのかね。わたしには何のことか分からない。

ロレンツォ 君はこのただひとつの問題を議論することで満足して、その後にもうひとつの問題をつけ加えたりしないということだ。

アントニオ もうひとつの、と君は言うのか。まるでこのひとつの問題だけで十分どころかそれ以上であるのではないかのように。だからわたしは、どんな夕食をも君から求めないだろうことを、喜んで君に約束するよ。

ロレンツォ それではさあ、問題そのものを言い表わしてみたまえ。

アントニオ よく言ってくれた。もし神が未来を予見するとするならば、神が予見したのとは別な仕方では起こりえない。例えば、もし神がユダを裏切り者と見たとするならば、ユダが裏切り者とならないということは不可能である。すなわち、神には予見が欠けているとわれわれが思おうとする——そんなことはありはしないことだが——のでない限り、ユダが裏切ることは必然的である。もしそう（神が予見をもっている）とするならば、人類がその能力の中に自由意志をもっていないと当然見なされるべきである。そしてわたしはただ悪人についてだけ語るのではない。なぜなら、悪人が悪をなすことが必然的であるように、逆に、善人が善をなす

ことも必然的である⁸⁾、——もし自由意志を欠いている者が善人とか悪人とか言われうるとするならば、あるいは必然的で強制されたかれらの行動が正しいとかそうでないとか見なされうるとするならば。ところでこうしたことからどんなことが帰結するか、君自身よく分かることだ。なぜなら、神がある者を正義のゆえに賞め、他の者を不正のゆえに非難するという、そしてある者には褒美をあたえ、他の者には罰をあたえるということは、もっと率直に言えば、正義の反対であるように思われる。それというのも、人間の行動が神の予知から必然的に帰結するのであるから。それゆえわれわれは、宗教、敬虔、神聖、儀式、供儀を放棄しなければならない。われわれは神から何も期待しない方がよい。いかなる祈りもしないようにしよう。神のあわれみをまったく乞わないようにしよう。精神をより良く改革することをなおざりにしよう。最後に、われわれの正義にせよ不正にせよ、神によって予知されているのであるから、気に入ることでなければ何もしないようにしよう。このようにして、もしわれわれが自由意志をあたえられているとするならば、神は未来を予見しないと思われるし、またもしわれわれが自由意志を欠いているとするならば、神は正しくないと思われる。わたしにこうしたことを疑わせるいわれは、以上御覧の通りの次第だ。

ロレンツォ 君は実際、問題を提起しただけでなく、それをまたいっそう詳細に追求した。神はユダが裏切り者となるであろうことを予見した、と君は言う。それゆえ、神はユダが裏切るようにしむけたのか。わたしにはそうは思われない。実際、神は人間によってなされるであろうある事柄を予知するとしても、その人間がそれを行うのは何ら必然的なことではない。なぜなら、かれはそれを意志によって行うのであるから。だが、意志的なことは必然的ではありえ

8) 予知への障害としてここでアントニオによって提起された道徳的（あるいは心理学的）決定論は、ユピテルによって創造されたセクストゥスの悪い本性がかれに罪を犯させるであろうと、ロレンツォがセクストゥスのことを語る時、ロレンツォがアポロンに帰している話と比較される。——トリンカウスの注。

ない。

アントニオ わたしがそんなにたやすく君に降参したり、汗も血も流さずに逃げ出すなどと期待しない方がいい。

ロレンツォ 勇敢でありたまえ。近寄って組み討ちをしよう。投槍でなく剣で勝負を決しよう。

アントニオ ユダが行ったのは意志によってであって、それゆえ必然によってではない、と君は言う。かれが意志によって行ったということ否定することは、まさにこの上ない恥知らずであろう。それゆえ、わたしは何と言ったらよいのか。この意志は、神がそれを予知していたがゆえに、確かに必然的なものであったと。すなわち、神によって予知されていたことを、ユダが欲し行うことは必然的であった。さもなければ、かれは予知を虚偽なものとしたであろうから。

ロレンツォ 神の予知からわれわれの意志や行動にとっての必然性が由来するとなぜ君に思われるのか、わたしにはまだ分からない。実際、もしある事が在るだろうと予知することが、その事が起こるようにするとすれば、確かに、ある事が在ると知ることは、その同じ事が在るようにする。ところがもしわたしが君の才知をよく知っているとするならば、それが在ることを君が知っているがゆえに、あるものが在る、とは君は言わないだろう。例えば、今は昼であるということを君は知っている。君がそのことを知るがゆえに、昼であるのか。あるいは反対に、昼であるがゆえに、昼であることを君が知るのか。

アントニオ 続けてくれたまえ。

ロレンツォ 同じ道理が過去についても当てはまる。8時間前には夜だったということをわたしは知っている。だがわたしの認識が、それがそうであったとするのではない。むしろ夜であったがゆえに、夜であったとわたしは知るのである。そしていっそう問題点に近づかんがために、8時間後には夜となるだろうということ、わたしは予知している。そしてそのために夜となるのだろうか。まったくそうではなくして、

夜となるだろうがゆえにわたしはそれを予知するのだ。ところで、人間の予知がある事の起こる原因でないとするならば、神の予知もまたそうではない。

アントニオ わたしを信じたまえ、そうした比較はわたしたちを欺くものだ。現在と過去を知ることと、未来を知ることとは別なことだ。なぜなら、ある物が在るとわたしが知る時、そのことは変化されえない。ちょうど、今昼であるということが、昼でないようになりえないように。また過去も現在と異なっているものを何ももっていない。なぜならば、それがなされた時にわれわれはそれを知ったのではなく、それがなされていた時、そしてそれが現前していた時、われわれはそれを知ったのである。それが過ぎ去った時にではなくして、それが現にあった時に、夜であったことをわたしは知ったのである。それゆえ、これらの場合に、それがこのようにあることをわたしが知るがゆえに、ある物がかつて在り、あるいは現に在ることをわたしが認めるのではなくして、それが現に在り、あるいはかつて在ったがゆえに、わたしが知ることをわたしは認めるのである。だが未来については話は別である。なぜならそれは変化しやすいからである。そして未来は不確かであるがゆえに確実に知れえない。それゆえ、われわれは神から予知を奪い取らないために、未来が確実にあり、従って必然的であることを認めなければならない。こうしたことは、われわれから自由意志を奪うことである。そして神が未来を予言したがゆえにそのようになるであろうのではなくして、そのようになるであろうがゆえに神がそう予言したと、今しがた君が言ったことを言うことができない。このようにして、神は未来を予知せざるをえないのだというような侮辱を、君は神に加えることになる。

ロレンツォ 君は見事に武装し防備をほどこして戦いにやって来た。だが僕か君か、二人の中のどちらが間違っているか調べてみよう。だが先ずわたしは、この後の問題について手短かに答えよう。君の言うところによれば、もし神が、

そうなるはずであるがゆえに未来を予見するとするならば、かれは将来のことを予見せざるをえないという必然性のもとで働くことになる。ところがこうしたことは、必然性にではなくして、本性に、意志に、権能に帰せられるべきである。もしたまたま、神が罪を犯しえないとか、死にえないとか、その知恵を放棄しえないということが、弱さのせいであって、むしろ権能や神性のゆえではない、とするのでないならば。このようにして、神が未来を予見しないわけにいかない——こうしたことは一種の知恵なのであるが——とわれわれが言うとき、かれに侮辱を加えているのではなくして、名誉を帰しているのである。それゆえ、神は起こるべきことを予見しないわけにいかないと、わたしははばかりことなく言うであろう。今や君の最初の答えに移ろう。すなわちそれによると、現在と過去とは変化しえないゆえに知られうるが、未来は変化しうるゆえに予知されえない。そこで今質問するけれども、今から8時間して夜とならないというようなことが起こりうるだろうか。夏の後には秋となり、秋の後には冬となり、冬の後には春となり、春の後には夏となるということはない、などというようなことが起こりうるだろうか。

アントニオ それらは自然的な事象であって、自然的な事象というものはいつも同じ経路を走っているものだ。だがわたしは意志的な事柄について話しているのだ。

ロレンツォ 偶然的な事柄について君は何と云うのかね。それらに必然性もたらされることなしに、それらが神によって予見されうるのかね。たまたま今日雨が降るかもしれないとか、わたしが宝物を見つけるかもしれないとかいうことが、いかなる必然性もなしに予知されうるということ、君は認めるとでも言うのだろうか⁹⁾。

アントニオ どうしてわたしがそれを認めてはならないのか。わたしがそれほど神について悪

9) ポエティウスは、摂理と偶然的な出来事とは両立しうることを証明するために、埋められた宝物についての同じ例を用いている。——トリンカウスの注。

く考えていると君は思うのかね。

ロレンツォ 良く考えていると君が言うとき、君が悪く考えていないことは確かさ。実際、もし君がこうしたことを認めるなら、なぜ意志的な事柄について疑うのか。なぜなら、両者何れの事柄も両者の何れの側にも入りうるからだ。

アントニオ 事柄はそんな風ではない。なぜなら、偶然的な事柄は、それらのある本性に従う。それゆえ、医者や船乗りや農夫たちは、多くのことを予見するのがつねである。なぜならかれらは、先行せるものから帰結を引出すから。こうしたことは意志的な事柄においてはなされえない¹⁰⁾。君、わたしが左右のどちらの足を先に動かすか当ててみたまえ。君がどちらだと言ったにせよ、裏切られるだろう。なぜなら、わたしは別な足を動かすだろうから。

ロレンツォ お尋ねするが、かつてこのグラレアほど才知にたけた者が誰かいたろうか。かれは、アポロンを欺くために、外套の下にもっていたすずめが生きてるか死んでいるか尋ねた男のような仕方で、自分は神をだますことができているのだ。なぜなら、君が「予言せよ」と言ったのは、わたしにではなくして神にだからだ。実際、わたしはぶどうの収穫が良いかどうか予言することさえできはしない。ところが君は、農夫たちにはそうすることができると言う。だが君がその左右の足のどちらを先に動かすだろうか神は知らないと言い、またそのように思うことによって、君は自分を大きな罪に巻きこんでいるのだ。

アントニオ 君はわたしが議論をするために尋ねているのではなくして、何か本気で主張していると思っているのかね。しかも君は、こうした話によって逃げ口上を言い、あたかも地歩を譲

10) ヴァッラはこのようにしてさまざまな出来事を、「いつも同じ経路を走っている自然現象」と、「それ自身のある本性に従う偶然的なもの」と、「意志の事柄」とに分類した。人間の行動は人間の個人的本性に従うと、かれは後に論じるゆえに、かれは、恩寵のたまものを残して、自然的決定論者であるように見えるであろう。バロツィ (Barozzi) がロレンツォ・ヴァッラ論 (フィレンツェ, 1891年) において、ヴァッラを実証主義者と呼んだとき、言わんとしたことはこのことである。——トリンカウスの注。

ることによって戦いを避けているように見える。

ロレンツォ あたかもわたしが、真理のためよりもむしろ勝利のために戦ったかのようだ。わたしがどれほど地歩を奪われたのか見てみたまえ。神は今君の意志を、君自身よりも良くさえ知っていることを、君は認めるかね。

アントニオ 確かに認めるよ。

ロレンツォ 君はまた、意志が提起する以外のことをしないでであろうことを認めることも必要だ。

アントニオ もちろんそうするよ。

ロレンツォ それゆえ、もし神が行動の源である意志を知っているとすれば、かれが行動を知らないということがどうしてありえようか。

アントニオ いやまったくそんなことはないよ。わたしがどんな意志を自分がもつかを知っているとすれば、わたしが何をしようか、わたし自身さえ知らないからだ。実際、わたしは是非ともこの足かその足を動かそうと欲するのではなくして、かれが述べるであろうのとは別な足を動かそうと欲するのだ。それゆえ、もし君がわたしを神と比較するとすれば、わたしが自分の行方であろうことを知らないように、神もまたそれを知らないのだ。

ロレンツォ 君のこうした詭弁を反駁するのに、何の難しいことがあるか。君はかれが言うであろうこととは別な仕方で対応しようとして構えており、もしかれが右と言ったならば、君は左を先に動かそうとしているということを、かれは知っているのだ。それゆえ、かれが左右の中の何れと言おうとも、起こるであろうことはかれに良く知られているのだ。

アントニオ だがかれは、両方の中のどちらと言うだろうか。

ロレンツォ 君は神について話しているのか。君の意志をわたしに知らせてみたまえ。そうすれば、起こるであろうことをわたしは告げるだろう。

アントニオ それ、君はわたしの意志を知ろうとしている。

ロレンツォ 君は右足を先に動かすだろう。

アントニオ ほら、左足だ。

ロレンツォ それで君はわたしの予知が虚偽であることを示したのかね。君が左足を動かすだろうことを、わたしは知っていたのだから。

アントニオ それではなぜ君は思っていたこととは別なことを言ったのか。

ロレンツォ 君自身の策略で君をだますためであり、欺こうと欲している者を欺くためだ。

アントニオ しかし神自身は答える際にうそをついたり、だましたりしないだろう。また君は他の者の代りに、かれが答えないだろうことを答えることによって、正しくふるまっていない。

ロレンツォ 君はわたしに「予言せよ」と言ったのではないか。だからわたしは、神の代りにではなく、君が尋ねたわたし自身のために答えなければならなかったのだ。

アントニオ 君は何と変わりやすいのだ。少し前には、わたしが「予言せよ」と言ったのは神にであって、君にではないと、君は言っていた。ところが今はその反対のことを言っている。神よ、左右のどちらの足をわたしが先に動かすか、答えて下さいますように。

ロレンツォ ばかばかしい。まるで神が君に答えてくれるみたいだ。

アントニオ 何だって。もしかれが欲したならば、本当に答えることができるのでないか。

ロレンツォ むしろ、真理そのものである方が、うそをつくことができるのでないか。

アントニオ それではかれは何を答えるだろうか。

ロレンツォ もちろん、君が行うだろうことをだよ。しかしながら、君には聞こえないのだが、かれはわたしに語るかもしれないし、それらの人々の誰かに語るかもしれないし、多くの人々に語るかもしれない。そしてかれがそうしたことをした時、かれが真の予言をしたのだと君は思わないかね。

アントニオ もちろん、真の予言をしたと思うよ。だがもしかれがわたしに予言したとすれば、どうなると君は思うか。

ロレンツォ わたしを信じたまえ。神をだます

ことをこのように願う君が、君が行うだろうとかれが言ったことをもし聞いたとするならば、あるいは確かに知ったとするならば、愛によってかあるいは恐怖によって、君はかれによって予言されたと知ったことを、急いで行うだろう。だが予知と何の関係もないこれらのことは放っておこう。予知することと、未来を予言することとは別なことだ。予言のことはさておいて、もし君が予知について言うべきことがあるならば、言いたまえ。

アントニオ そうなるように。なぜなら、わたしによって言われた事柄は、わたしを擁護するためというよりも、君に対して反駁するために答えられたのだからだ。それゆえわたしは、われわれが横道へ外れたところから、ユダが裏切ることは必然的であったとわたしが言ったところへと戻る。なぜなら、われわれが摂理をまったく取り除くのでないならば、神がそのようになるだろうと予見したのであるから。実際、もし予見されたのとは別な仕方でも物事が起こることが可能であったならば、摂理は取り除かれる。だがもしそうしたことが不可能であったならば、自由意志が取り除かれる。こうしたことは、かれの摂理を取り除いた場合に劣らず、神にふさわしくないことである。わたしとしては、神が善においてより劣ったものであることの方がましだと思うだろう。善においてより劣れば、かれは人類に害をあたえるだろう。知恵においてより劣っていても、害をあたえることはないだろう。

ロレンツォ わたしは君の謙虚さと誠実さをほめ讃える。なぜなら、勝つことができない場合には、君はかたくなに戦わずに譲歩して、他の防御に没頭するからだ。他の防御というのは、すでに君が提示していたことの論拠であるようにわたしには思われる。それゆえ、君に答えるに際して、もし予知されたのとは別な仕方でも起こりうる可能性があるとするならば、予知は誤りうることを帰結するということを、わたしは否定する。それらが同時に真実であるということに妨げるものは何か。事によると、別な仕方でも

起こりうるからといって、直ちに起こるだろうか。ある事が起こりうることと、ある事が起こるだろうこととは、まったく異なったことである。わたしは夫でありうるし、兵士あるいは司祭でありうる。だからといって、わたしは直ちにそうなのだろうか。まったくそんなことはない。そのように、わたしは起こるのであることとは別な仕方でも行動することができる。だがわたしは別な仕方では行動しないだろう。そしてたとえそれが予見されていたとしても、罪を犯さないことがユダの手中にあった。だがかれは罪を犯すことの方を選び取った。こうしたことはすでに、そのようになるであろうと予知されていた。従って、自由意志はそのままにとどまりながらも、予知は有効である。この自由意志は、二つの事の中から一つを選択するだろう。なぜなら、二つの何れをも行うことはできないから。両者の中の何れが選択されるであろうかを、かれはその光によって予知する。

アントニオ さあ君をつかまえたぞ。可能であるものは何でもあたかも存在するかのように認められなければならないということが、哲学者たちの規則であることを、君は知らないのか。ある事が予知されたのとは別な仕方でも起こることはありうる。それゆえ、その事がそのように起こるのであることが、認められなければならない。こうしたことから、予知が信じていたのとは別な仕方でも起こることがあるゆえ、予知は誤つということは今や明白である。

ロレンツォ 君はわたしに哲学者たちの規則を適用するのか。あたかもわたしがそれらの規則にあえて逆らわないかのように。君の言うその規則は、それが誰のものであるにせよ、本当にわたしにはきわめてばかげたものと思われる。なぜなら、わたしは右足を先に動かすことができるし、そのようになるであろうことをわれわれは認めよう。わたしは同様にして左足を先に動かすこともできるであろうし、それもまたそうなるであろうことを認めよう。それゆえ、わたしは左足よりも先に右足を、右足よりも先に左足を動かすだろう。こうして可能なものへの

君の譲歩を通じて、わたしは不可能なものに行きあたるだろう。それゆえ、起こることが可能であるものは何でも必ず起こるだろう、ということとは認められないことを、君は理解しなければならぬ。もしそうだとすれば、君は神が予知するのとは別な仕方で行動しうるが、しかしながら君は別な仕方では行動しないだろう。それゆえ、君は神をだますこともしないだろう。

アントニオ わたしはこれ以上敵対しないだろう。またわたしは自分のすべての武器を打ち砕いてしまったので、人々の言うように、爪と歯で戦うこともしないだろう。だがもし君がこうしたことをわたしにいつそう詳細に説明し、明らかにわたしを説得すべきことがあるならば、わたしは耳を傾けたいと思う。

ロレンツォ 君は君の同類なので、誠実とつましきさという別な賞讃を欲しがっている。そこでわたしは、君が望むことをしよう。しかもわたしは、自分の自発性によって行なっていたのだから。実際、これまで言われたことは、わたしが言おうと決心したことではなくして、弁明の必要性そのものが要請したことであった。ところで今は、予知が自由意志の妨げではないことを、何がわたしに納得させ、また恐らくは君にも納得させるかを聞いたまえ。だが、手短かに触れるか、それともいささか長くはあるがいつそう明瞭に述べるか、君はどちらの方を選ぶか。

アントニオ 実を言えば、明瞭に話す者は最も短く話すようにわたしにはつねに思われる。ところがあいまいに話す者は、たとえきわめてわずかな言葉で話すとしても、あまりに冗長である。さらに、話の豊かさは、それ自身、説得に有用で適合したあるものをもっている。それゆえ、わたしは初めから、この問題をできるだけ明瞭に語るように君に求めたのであるから、君がわたしの意向について疑うべき理由がない。ともかく、二つの話し方の中、君にとってより有益だと思われる方を、行ってくれたまえ。なぜならわたしは、わたしの判断を君の判断よりも先に置くようなことは決してしないだろうから。

ロレンツォ 君の望みに従うことは、実際、わたしにとって大切なことだ。君がより有益だとみなすことは、わたしもそうみなす。そこで、ギリシア人のもとであれほど祝いたてまつられたあのアポロン神は、その本性によってか、あるいは他の神々が譲ったことによってか、あらゆる未来の事柄を——人間に関する事柄のみならず神々に関する事柄をも——予見し認識していた。そしてもしわれわれが伝承を信じるならば、かれに伺いを立てる者たちに、未来の事柄について真実で疑いえない神託をあたえていた。だがその時にはそれらの神託は真実であったとわれわれは信じよう。なぜなら、それを妨げるものは何もないから。セクストゥス・タルクイニウスは、かれにどんなことが起こるだろうかと、アポロンに伺いを立てた。アポロンはいつもするように、詩でもって次のようにかれに答えた、わたしたちは想像すべきだ。

「おまえは追放され貧しい者となり、
怒った都によって殺されるだろう。」

これに対してセクストゥスは、「あなたは何かということをおっしゃるのですか、アポロンよ。あなたがこれほど残酷な運命をわたしに告げるような、かくも悲しい死のさだめをあてがうような、どんなことをわたしはあなたにしましたか。あなたの答えを取り消して、もっと喜ばしいことを予言して下さい。王にふさわしい供物をあなたに供えたわたしに、もっと好意をもっていただきたい」。そしてこれに対してアポロンは、「若者よ、おまえの供物はわたしには確かに有難いし、好ましいものである。その代りにわたしは神託をあたえた。なるほどそれは悲惨で悲しいものだった。わたしはもっと喜ばしいものであって欲しかった。だがそうすることは、わたしの力の中にはなかった。わたしは運命を知るが、それを定めるのではない。わたしは運命を告げることはできるが、それを変えることはできない。わたしは運命の告知者であって、判定者ではない。もしもっと良い事がおまえを待っていたならば、わたしはもっと良い事を告げましょう。こうしたことのいかなる罪もわたしに

はないのだ。実際わたしは、わたしの予見する自分自身の不幸にさえも、逆らうことができないのだから。もし君がそうしたいなら、ユピテルを非難したまえ。パルカ（運命の女神）を非難したまえ。出来事の原因がそれに由来している運命を非難したまえ。運命の支配と意志とはかれらの掌中に置かれている。わたしの掌中には、ただの予知と予言があるのみだ。おまえは神託を求め、わたしはあたえた。おまえは真実を尋ね、わたしはうそをつくことができなかった。おまえは遠い地域からわたしの神殿にやって来たし、わたしは答えをあたえずに送りかえすべきではなかった。次の二つのことは、わたしには無縁である。すなわち、虚偽と沈黙」。こうした話にセクストゥスは、次のように答えることが正当にできたであろうか。「いや罪はまさにあなたにあります、アポロンよ。わたしの運命をあなたの知恵で予言するそのあなたに。なぜなら、もしあなたが予言しなかったならば、こうしたことがわたしに起こることはなかったでしょうから。」

アントニオ そのように答えることは不当であるばかりではない。決してそのように答えはしない。

ロレンツォ それではどのように。

アントニオ 君自身が言うべきだ。

ロレンツォ こんな風にはないかね。「わたしは、聖なるアポロンよ、まさにあなたに感謝します。あなたはうそでわたしを欺きませんでしたし、沈黙でわたしをはねつけませんでした。ですが、願わくはまたこのことを答えて下さい。なぜユピテルは、罪もなく邪気もない神々の崇拜者であるわたしに、このように悲しい運命をあてがうほど、わたしに対して不公平で残酷なのでしょう。」

アントニオ もしわたしがセクストゥスであったならば、確かにそんな風にアポロンに答えただろう。だがそれに対してアポロンは何と言うだろう。

ロレンツォ 「おまえは自分のことを罪もなく邪気もないと称するのか、セクストゥスよ。思

い違いをしてはならない。おまえが犯すであろう犯罪は、すなわち姦通、裏切り、偽誓、またおまえにとって言わば遺伝的な傲慢は、責められるべきものである。」セクストゥスはそのときこう言うだろうか、「わたしの犯罪の責めは、むしろあなたに帰せられるべきです。なぜなら、罪を犯すであろうとあなたが予知したそのわたしが、罪を犯すことは必然的であるからです」と。

アントニオ セクストゥスがもしそのように答えるとしたら、不当であるのみならず、気が狂っているのだろう。

ロレンツォ 君はかれのために何か言うべきことがあるかね。

アントニオ まったく何もない。

ロレンツォ それゆえ、もしセクストゥスがアポロンの予知について言い立てるべきことを何もっていないならば、ユダも確かに、神の予知を非難すべきことをもっていないのだ。もしそうであれば、君が混乱させられ狼狽させられたと言っていた君の疑問には、確かに満足があたえられたわけだ。

アントニオ 本当に満足があたえられた。そしてわたしはほとんどあえて期待していなかったことなのだが、十分に解明された。そのために、わたしは君に感謝をし、言わばほとんど不滅の恩義を感じている。ポエティウスがわたしに示すことができなかったことを、君は示したのだから¹¹⁾。

ロレンツォ そして今わたしは、かれについて何か話をするようにしよう。なぜならわたしは、君がそれを期待していることを知っており、またわたしはそうするように約束したからだ¹²⁾。

アントニオ ポエティウスについて君は話をしてくれるというのか。それはわたしには有難く、

11) このようにして予知は、人間の行動に対する責任から解放される。だがそうすることによってヴァッラは、人間の本性を、自由意志を所有しているものとしてよりも、むしろ予定された条件によって行動するものとして考えた。つづく文章はこのことを、さらにいっそう明らかにするであろう。——トリンカウスの注。

12) 以下のことはポエティウスとはほとんど関係がないように思われる。——トリンカウスの注。

喜ばしいことだろう。

ロレンツォ わたしたちが企てた寓話の筋を続けよう。君は、セクストゥスがアポロンに答えるべきことを何ももたないと見なしている。君に尋ねるが、君がその職務において大変不面目なことを仕出かすだろうと言って、君に職務や官職を授けることを拒む王に対して、君は何と言うだろうか。

アントニオ 「王よ、あなたのこのきわめて強力で忠実な右手にかけて、わたしはこの職務において不面目なことを仕出かさなないことを、あなたに誓います。」

ロレンツォ セクストゥスはアポロンに同じことを言うだろうと考えたまえ。「アポロンよ、わたしはあなたのおっしゃることを犯さないだろうことを、あなたに誓います」と。

アントニオ それに対してアポロンは何と言うだろう。

ロレンツォ もちろん、かれは王のようには答えないだろう。なぜなら王は、未来が何であるかということ、神のように確知しないからである。それゆえアポロンはこう言うかもしれない。「セクストゥスよ、わたしはうそつきだろうか。わたしは未来が何であるか確知しないのだろうか。わたしが語ったのは、おまえに警告するためだったのか、あるいは託宣を下すためだったのか。わたしはふたたびおまえに言う。おまえは姦夫となるであろう。裏切り者となるであろう。偽誓者となるであろう。傲慢で邪悪な者となるであろう」と。

アントニオ アポロンによる価値のある話だ。これに対してセクストゥスは、何を言うことができるだろうか。

ロレンツォ かれが自分自身の弁護において何を述べうるか、思い浮ばないのか。かれはどのようにおとなしい心でもって、自分が罪を宣告されるのを辛抱するだろうか。

アントニオ かれが罪を犯した者であるならば、なぜそうしないのか。

ロレンツォ かれは罪を犯した者であるのではなく、未来においてそうなるだろうと予言され

ているのだ。だがわたしの思うには、アポロンが君にこうしたことを告げたならば、君は祈りへ逃げこみ、君にもっと良い心をあたえ、運命を変えてくれるように、アポロンにではなくユピテルに懇願するだろう。

アントニオ わたしはそのようにふるまうだろう。だがアポロンをうそつきとするだろう。

ロレンツォ 君の言うことは正しい。もしセクストゥスがかれをうそつきとすることができなければ、無駄に祈りをあげることになるだろう。かれはどうするだろうか。かれは腹を立てないだろうか。怒らないだろうか。不平をぶちまけないだろうか。「アポロンよ、わたしはこのように犯罪を差し控えることができないのですか。徳をいつくしむことができないのですか。邪悪から心を変えることができないのですか。自由意志をそなえていないのですか」と。

アントニオ セクストゥスは勇敢に、しかも真実に正しく語っている。それに対して神はどう答えるだろうか。

ロレンツォ 「セクストゥスよ、事態はこのようなのだ。ユピテルは狼を強欲なものとして、うさぎを臆病なものとして、ライオンを勇敢なものとして、ロバを愚かなものとして、犬を狂暴なものとして、羊を柔和なものとして創造したように、ある人々を心の硬い者として、他の人々を心の柔らかい者としてつくり、ある人を邪悪に傾きがちな者として、他の人を美德に傾きがちな者として生んだ。さらに、ある人には矯正しうる気質をあたえ、他の人には矯正しえない気質をあたえた。ところでおまえには、いかに骨折ってみても矯正されえない邪悪な魂をあてがった。このようにしておまえは生来の性質によって悪を行うだろう。そしてユピテルはおまえの行動とその為せる業によってひどく罰するだろう。そしてそうなるだろうことを、かれは冥界の沼にかけて誓ったのだ。」

アントニオ アポロンは見事に自分自身を弁護している。だがかれは、なおいっそうユピテルを責めている。わたしは実際、ユピテルのよりもセクストゥスの肩をもつ。かれはきわめて正

当に次のように苦情を訴えうるであろう。「そしてなぜその罪が、ユピテルのものであるよりもむしろわたしのものなのですか。わたしは邪悪にふるまう以外に許されていないのですから、なぜユピテルは、かれ自身の罪のためにわたしに罰を科するのでしょうか。なぜかれは罪のないわたしを罰するのですか。わたしがどんなことをするとしても、わたしはそれを自由意志によってではなく、必然性によってするのです。わたしがかれの意志や権能に逆らうことが、どうしてできるのでしょうか。」

ロレンツォ これこそは、わたしの証明として述べたいと思ったことなのだ。これがこの寓話の意味なのだ。すなわち、神の知恵は神の意志や権能から分離されえないのに、わたしはアポロンとユピテルという比喻によってそれらを分離したのだ。一人だけの神では成就されえなかったことが、二人の神においては成就されえた。両者の何れも、その固有の本性をもっている。一方の神は人間の気質を創造し、他方の神はその気質を知る。したがって、予見は必然性の原因ではなくして、それが何であるにせよ、こうしたすべてのことは神の意志に帰せられるべきだということは、明らかだと思われる。

アントニオ 見てみたまえ。わたしは、君がそこから引出した同じ井戸の中へ、ふたたび真逆さまに落ちることになる。この疑問は、わたしがユダについて述べた疑問と同様なものだ。ここでは必然性が神の予知に帰せられていたが、ここでは神の意志に帰せられる。だが君がどのように自由意志を取除くかということが、何の重要性をもつか。実際君は、自由意志が予知によって抹殺されることを否定し、意志によって抹殺されるのだと言う。そうしたことによって、問題は同じ所にもどる。

ロレンツォ わたしは、自由意志が神の意志によって抹殺されると言っているかね。

アントニオ そう帰結するのではないか。もし君が疑問を解くのでないならば。

ロレンツォ 君は、誰かが君にそれを解いてくれることを求めるのかね。

アントニオ 確かにわたしは、君がそれを解いてくれるのでなければ、君を放しはしないよ。

ロレンツォ だがそれは取り決めにないことだよ。昼食に満足しないで、晚餐をも求めることだ。

アントニオ このように君はわたしをたばかったのか。そして偽瞞によって約束するように強いたのか。その中にたばかりの入っている約束は成り立たない。それに、もし君がわたしの食べたものを吐き出すように強いるならば、あるいはもっと上品に言えば、君がわたしを迎え入れた時に劣らず、わたしを空腹のまま送り出すとすれば、わたしは君から昼食をもてなされたとはみなさないよ。

ロレンツォ わたしを信じてくれたまえ。わたしは君をたばかるために君に約束をしようとは欲しなかった。なぜなら、昼食さえもあたえることが許されていなかった時に、そうしたことはわたしにとって何の利益があったらうか。君は十分にもてなされて、そのためにわたしに感謝した位であるのに、もしわたしが君にそれを吐き出すことを強いたとか、君が来た時のように空腹のまま送り出したとか言うとするならば、君は恩知らずというものだ。そうしたことは、昼食をではなく晚餐を要求することであり、昼食にけちをつけることを望んで、人間の食物ではなく神の食物であるアンブロシア（神々の食物）とネクタル（神々の酒）を君に供することを要求することだ。わたしは自分の生けすの魚と自分の猟場の鳥、それに郊外の葡萄酒を君に供した。だがアンブロシアやネクタルを要求するのなら、アポロンやユピテル自身から求めたまえ。

アントニオ アンブロシアとかネクタルと君の呼ぶものは、詩的な虚構ではないか。それらの空しい物のことは、空しく虚構的な神々であるユピテルやアポロンに任せておこう。君はこれらの生けすや猟場や酒蔵から、昼食を取り出した。わたしは同じそれらの所から、夕食を求めるのだ。

ロレンツォ 君はわたしのことを、わたしの夕

食にやって来る友を追い出すほど野暮だと思っているのか。だがわたしはこの問題がどんな風に終わるだろうかを見たので、すぐさま自分の利益を考慮し、尋ねられた一つの事を除いては、君がわたしからさらに何か要求することがないように、君に約束させるように強いたのだ。それゆえ、わたしが君と関わっているのは、権利によってよりも公平によってなのだ。もし君が友情を信ずべきだと思うならば、わたしのもとはまったくくないこの晚餐を、恐らく他の人々のもとで得るだろう。

アントニオ 恩恵をほどこした者によって恩知らずな者と思われたり、友人によって不実な者と思われたりしないように、わたしはもうこれ以上君を煩わせはしないだろう。しかしながら、誰から聞きただしたらよいと、君はわたしに勧めるのかね。

ロレンツォ もしそうすることができたなら、君を晚餐に送り出したりせず、わたしが君と一緒に晚餐をしに行くだろう。

アントニオ これらの——君の言うところによれば——神的な食物は、誰も所有していないと君は思うのかね。

ロレンツォ なぜそのように思ってはならないのかね¹³⁾。君は、レベッカがイサクによってもうけた二人の子供について、つぎのように言っているパウロの言葉¹⁴⁾を読まなかったのか。「なぜなら、まだ生まれてもいず、良いことや悪いことを行ってもいない時に、業によるのでなく召し出す者による選びによって、神の計画は変わることがないために、『兄は弟に仕えるであろう』と言われた。『わたしはヤコブを愛し、エサウを憎んだ』と書かれているように。それゆえ、何と言おうか。神のもとには不公平があるのか。そんなことはない。なぜなら、神はモイゼにこう言っている。『わたしは、わたしがあわれむ者をあわれむであろう。そしてわたし

があわれむであろう者に、あわれみをあたえるだろう。』それゆえ、選びは望む者や走る者によらず、あわれみをあたえる神による。実際、聖書はファラオンにこう言っている、『わたしがあなたを起き上がらせたのは、まさにこのことのためにである。すなわち、わたしがあなたにおいてわたしの力を示し、わたしの名が地にあまねく告げ知らされんがためである』。それゆえかれは、かれの望む者にあわれみをあたえ、かれの望む者をかたくなにする。そこであなたはわたしにこう言う、『今なお何で糾問されるのか。神の意志に誰が逆らえるのか』と。ああ人よ、神に口答えするおまえは何者なのか。造られた者が造った者に向かって、『何でわたしをこのように造ったのか』と言えようか。陶工は同じ土くれから、貴いことに用いる器と、卑しいことに用いる器とをつくる権能をもっていないのか。」そして少し後に¹⁵⁾、あたかも神の知恵のあまりの輝きによって目をくらまされたかのように、こう叫んでいる、「ああ、神の知恵と知識の富の深さよ。かれのさばきは不可解であり、かれの道は探りえない」。第三天にまで奪い去られて、人間に語ることが許されない秘密な言葉を聞いた選びの器が、それにも拘らずそれらのことを語ることができぬばかりか、把握することもできないとするならば、一体誰が、探究したり理解したりすることができるかと希望するだろうか。そして自由意志は、予知によってと同じ仕方で、神の意志によって妨げられるとは言われないということ、よく注意したまえ。なぜなら、意志¹⁶⁾は、神の知恵の中にある先行原因をもっているからだ。従って、神はきわめて賢明であってきわめて善良であるから、かれがなぜこの者を頑なにし、あの者をあわれむかということは、最もふさわしい原因によって導かれているのである。そして絶対的に善である神が善良に行動しないなどと考えることは不敬虔である。だが予知の中には先行者はない

13) 前の文章と以下のパウロからの引用において、ヴァッラはかれの立場を本質的に不可知論的なものとして述べているように思われる。——トリンカウスの注。

14) 「ローマ人への手紙」9章、11-21節（『創世記』25章23節参照）。——ガレンの注。

15) 「ローマ人への手紙」11章、33節。——ガレンの注。

16) これが神の意志なのか人間の意志なのか不明瞭であるが、神の意志とした方が意味をいっそう良くするように思われる。——トリンカウスの注。

のであり、正義や善のいかなる原因もまったくない。実際、「かれはなぜこれを欲するか」というように、「なぜかれはこれを予知するか」とは、われわれは言わない。なぜなら、予知されたのとは別な仕方で物事が起こるということが可能でないとすれば、自由意志を取り去ることであろう。だが今や、かれはいかなる必然性をももたらさない。またある者を頑なにし、他の者をあわれみながら、われわれから自由意志を奪ったりしない。なぜならかれは、こうしたことをきわめて賢明にまたきわめて聖なる仕方で行うからである¹⁷⁾。かれはその原因の隠れた理由を、あたかも金庫の中にのように、ある神秘の中に置いた。この理由をあえて探求して、頑なにされたり、非難されたりする者は、正義に従ってそうされるのだと言った人々がいたことを、わたしは隠しはしないだろう。なぜならわれわれは、最初の人祖の罪によって汚されて泥に変えられたあの塊に属しているから。だが、多くのことを述べずにおくとして、ただひとつの論拠で答えるとすれば、汚れなき質料で作られたアダム自身が、なぜ罪を犯すことによって頑んになり、かれの子孫をすべて泥としてしまったのか。

天使たちになされたことは、それに似ている。かれらのある者たちは頑んにされ、他の者たちはあわれみを得た。かれらは皆、同じ実体からなり、汚されていない同じ質からなっていたのに。もし大胆に言ってよければ、かれらは今なお、実体の本性において、塊の質において、言わば黄金のままでいる。選びによってある者たちがより良い質料に変えられたわけでもなければ、非難によってより悪い質料に変えられたわ

けでもない。そしてある者たちは、あたかも神の食卓に役立てられるために選ばれた器のように、名誉の恩寵を受取る。ところが他の者たちは、目から遠ざけられて、あらゆる汚らわしいものや廃物を受取る器とみなされうる。こうしたことは、泥となった場合よりも、もっと恥辱なことである。それゆえかれらの断罪は、人間のそれよりももっと哀れなものである。実際、天使たちがそれからつくられる黄金は、もしそれが汚物で満たされるならば、人間がそれからつくられる銀よりも、いっそう大きな侮辱を受ける。そのため、アダムにおいては銀の質料は、あるいはもし君がむしろこう言いたければ泥の質料は、変えられていないのであって、以前にあったのと同じままであった。それゆえ、その質料はかれの中にあつたように、われわれの中にある。同じ土くれから、貴いことに用いる器と、卑しいことに用いる器とがつくられると、パウロは言っていないか。名誉ある器が汚れた材料からつくられるとは、言われえない。それゆえわれわれは、言わば泥のというよりも銀の器である。そしてわれわれは長い間、恥辱の、断罪の、死の器であつたが、頑固の器ではなかつた。実際、神は、最初の人祖の違反によって——かれにおいてわれわれすべてが罪を犯したのであるが——死の罰をわれわれの中に注ぎ込んだが、頑固に由来する罪を注ぎ込んだのではない。パウロは同じことを言っている、「アダムからモイゼにいたるまで、アダムの違反と同じような罪を犯さなかつた人々にも、死が支配した¹⁸⁾」と。

もしアダムの罪によってわれわれが頑んにされたのならば、確かに、キリストの恩寵によって解放されて、われわれはもはや頑んにはならないであろう。このことはそうならない。なぜなら、われわれの多くの者が頑んであるから。それゆえ、キリストの死において洗礼を受けた者は、かゝる原罪やかゝる死からは解放されている。だが洗礼は十分ではないので、かれらの中のあ

17) こうしたことは、人間が自由意志をもつことをそのままにしておくように思われるであろう。だが神の知恵が問題に付されえないだけではない。自由意志そのものがあいまいな状況の中にそのままにおかれる、もしわれわれが頑んにされ、それゆえ罪を犯さないわけにいかないか、あるいはあわれみを示され、それによって善を行うことができるかであるとするならば。後者の状態は、自由に最も近いものであるように思われるであろう。自由はこのようにして、人間の自然（本性）的所有ではなくして、恩寵のたまもの——ルターにきわめて接近した立場——となる。——トリンカウスの注。

18) パウロ「ローマ人への手紙」5章、14節。——ガレンの注。

る者たちはあわれみを得る。そしてある者たちは、アダムや天使たちが頑なであったと同様に頑なである。それゆえ、神がなぜこの者を頑なにし、あの者をあわれむのかということ、答えたいと望む者がいたら答えるがよい。そしてわたしは、その者は人間というよりもむしろ天使だと告白する。もしこうしたことが、パウロに知られていない時に、天使たちに知られてさえいるならば——わたしはそうしたことを信じていないが（わたしがパウロにどれほど多くを帰しているか見てみたまえ）——。それゆえ、神の顔をいつも見ている天使たちが、これらのことを知らないとするならば¹⁹⁾、それらを完全に知りたいと欲するわれわれの無謀さは、いかばかりであろうか。だが話を終える前に、われわれはボエティウスについて何か言うべきだ。

アントニオ 君は折よくかれのことに言いおよんだ。なぜならわたしは、かれのことを考えていたところなのだ。なぜならわたしは、かれならばこのことを知っていて、パウロと同じ道を通じてではないが、同じ目的を旨ざしながら、他の人々にそうしたことを教えることができるかと期待していたから。

ロレンツォ かれはなすべき以上に自分を過信して、自分の能力以上のことに着手したばかりでなく、同じ目的に向かわず、始めた道をなし遂げなかった。

アントニオ なぜそうなのか。

ロレンツォ それを君は聞くだらう。実際、わたしが言いたいと思ったことは次のことなのだ。すなわち、パウロは先ずこう言っている、「(選びは) 望む者や走る者によらず、あわれみをあたえる神による」と。ところがボエティウスは、その議論の全体において、なるほど言葉によってではなく実質においてこう結論している、「予見する神によるのではなく、望む者や走る者による」と²⁰⁾。そのことから、もし意志についても語られないとするならば、神の予知について

議論することは十分でない。つまり、こうしたことは君の行ったことから証明される。君は最初の問題の説明で満足せずに、次の問題についても尋ねられるべきだとみなした。

アントニオ 君の諸論拠を徹底的に考察するならば、それに対してボエティウス自身さえも抗議すべきではないような、かれについてのきわめて真実な見解を、君は提示した。

ロレンツォ そしてキリスト教徒がパウロから離れ去り、パウロがすでに論じていたのと同じ題材を取り扱っているのに、かれのことを決して思い出もしなかった原因は、何であったと君は思うかね。しかも『哲学の慰め』の作品全体の中で、われわれの宗教についてはまったく何も見出されず、祝福された生活へと導く掟について、キリストについて、何も言及されず、ほとんど示唆されてもいない理由は何であったのか。

アントニオ わたしは、かれがあまりに熱烈な哲学の礼讃者だったからだと推測する。

ロレンツォ 君はきわめて良く推測している。あるいはむしろ良く理解している。実際、熱烈な哲学の礼讃者のいかなる者も、神には気に入られえないとわたしはみなす。それゆえボエティウスは、南風の代りに北風に従って、葡萄酒を積んだ船隊を、故国の港の中へ導かないで、野蛮人の海岸へ、そして異国の浜辺へとおしやうった。

アントニオ 君は、君の言うすべてのことをわたしに証明している。

ロレンツォ それゆえ、予知や、神の意志や、ボエティウスに関する質問について君を満足させたと思うので、話の幕を閉じて、これで終りとしよう。残りの話は、教えるためではなく、勧告するために語ろう。君は良く出来た魂をもっているのだから、勧告を必要としないかもしれないけれども。

アントニオ それでは話してくれたまえ。不都合で無益な勧告というものはない。わたしはそうした勧告を他人から喜んで受け入れるならわしだ。とりわけ、きわめて親しく重要な人

19) パウロ「ローマ人への手紙」9章、16節。——ラデッティの注。

20) 人間的独立の教説のかなり明瞭な拒否。——トリンカウスの注。

物——わたしは君をいつもそのようにみなしてきた——からは。

ロレンツォ 実際、わたしは君だけでなく、ここに居合わせている他の人々、そして先ず第一にわたし自身に勧告するだろう。ところで、ある者を頑なにし、他の者をあわれむ神の意志の原因が、人々によっても天使たちによっても知られないと、わたしは言った。だがもしこのことや他の多くの事柄についての無知のために、天使たちが神への愛からさめたり、かれらの任務の聖品を捨て去ったり、そのためにかれらの至福が減少したとみなしたりしないとするならば、われわれはこの同じ原因によって、信仰や希望や愛から離れ去るのだろうか。そしてわれわれはあたかも皇帝に対してのようにそむくのだろうか。またもしわれわれが賢者を、理由がなくともかれらの権威によって信ずるとするならば、神の力であり神の知恵であるキリストを信じないのだろうか。かれは言う、すべての者が救われることを望み、罪人の死を望まず、むしろ罪人が改心して生きることを望む、と。またわれわれは、善人には証文なしで金を貸すのに、欺瞞の見出されないキリストからは証文を要求するのだろうか。またわれわれは友人たちには命を委ねるのに、われわれの救いのために肉の命と十字架の死を引受けたキリストには、あえて命を委ねないのだろうか。われわれはこうした事柄の原因を知らない。そんなことは重要ではない。われわれは信仰によって立っているのであって、理性の蓋然性によって立っているのではない。それを知ることが、信仰の強化に大いに役立つのだろうか。謙虚の方がいっそう役立つだろう。使徒は言っている、「高ぶった思いをいдаかず、身分の低い人々と交わるがよい²¹⁾」と。神的な事柄の知識は有益であるか。愛の方がもっと有益である。実際、同じ使徒は言っている、「知識は高慢にするが、愛は教化する²²⁾」と。そしてそのことがただ人間的な事柄

の知識についてのみ言われたのだと君がみなさないように、かれはこう言っている、「そして啓示の偉大さによってわたしが高ぶらないように、肉のとげがわたしにあたえられた²³⁾」。われわれは高いことを知ろうと望まないようにしよう。むしろ自分自身を知恵ある者と呼びながら、愚か者とされた哲学者たちに似たものとならないように、用心しよう。かれらはいかなることをも知らないと思われぬように、あらゆることについて議論した。かれらはその顔を天へ上げて、その天を引き裂くとは言わないまでも、それをよじ登ろうと欲した。かれらはあたかも傲慢で無鉄砲な巨人たちのように、神の強力な腕によって地へ突き落とされ、シチリアのテューポエウスのように地獄へ埋められた。これら哲学者たちの主な者の中に、アリストテレスがいた。最善にして最大なる神はかれにおいて、アリストテレス自身のみならず他の哲学者たちの傲慢と無鉄砲をあらわにして、罪に処した。実際、アリストテレスは、エウリポス海峡の本性を調べることができなかつたので、その深淵の中に身を投げて沈んでしまった。だがその前にかれは、次のことを辞世として書き遺した、「アリストテレスがエウリポスを捉えなかつたので、エウリポスがアリストテレスを捉えた²⁴⁾」と。これ以上傲慢で、これ以上狂ったことが何かあるだろうか。あるいは、かれが法外な知識欲によって気違いとなり、自殺——わたしに言わせれば極悪非道なユダよりももっとむごい自殺——をするのを許すこと以上に公明正大な裁決でもって、神はアリストテレスの才知や、かれの他の同類の才知を、どのようにして処罰することができただろうか。それゆえわれわれは、高い事柄を知りたいという欲望を避けて、むしろ身分の低い人々と交わろう。実際、キリスト教徒にとって謙虚に感じるほど大切なことはないからだ。なぜならこのようにしてわれわれ

21) 「ローマ人への手紙」12章、16節。——ガレンの注。
22) 「コリント人への第一の手紙」8章、1節。——ガレンの注。

23) 「コリント人への第二の手紙」12章、7節。——ガレンの注。

24) ナチアンツのグレゴリウス『反ユリアヌス弁論第四』（ミーニェ版ギリシア教父集、第35巻、597）。——ガレンの注。

れは、神の荘厳さを感じるのだ。そこで、「神は高ぶる者に逆らい、へりくだる者に恵みをあたえられる」と記されている²⁵⁾。この恩寵を手に入れることができるように、わたしとしては、この問題についてもうこれ以上好奇心をもたないだろう。神の威厳を探索することによって、光によってめしいとされないためである。そして君もまたそうすることを希望する。わたしはこれらのことを勧告として語らなければならなかった。そしてわたしは君やここに居合わせた人々を鼓舞するためというよりも、わたしが心で納得していることを示さんがために語った。

アントニオ たしかにこの勧告は、君の心がきわめて良く納得していることを示したし、また他の人々に代わって答えてよければ、われわれの心をきわめて強く励ました。さらに君は、われわれの間でもったこの討論を文字に託し、他の人々もこの良きことに参加させるように、それを覚え書にしないのだろうか。

ロレンツォ 君は良い忠告をしてくれる。われわれはこのことについて、他の人々を審判者としよう。もしこのことが良ければ、かれらを参与者としよう。そしてこの討論を記し、君の言うように覚え書にして、とりわけレリーダの司教に送ろう。かれの判断よりもわたしがあえて優先させねばならないものを、わたしは知らない。そしてかれがひとり承認してくれれば、他

の人々が否認してもわたしは恐れないうらう。実際わたしはかれに、プラトンにとってのアンティマコスか、カトーにとってのキクロ以上のものを帰しているのだ。

アントニオ 君はそれ以上正しいことを言うか行うかすることはできない。そしてできるだけ早くそうしてもらいたい。

ロレンツォ そうなるだろう。

自由意志についての対話の終り

使用テキスト

- [1] Laurentius Valla : *De Libero Arbitrio*, in *Opera Omnia*, Tomus I, Basilea, Apud Henricum Petrum, 1540.
 [2] Lorenzo Valla : *De Libero Arbitrio*, in *Prosatori Latini del Quattrocento*, a cura di Eugenio Garin, Milano-Napoli, 1952.

なお参照した近代語訳は、上記の〔2〕に付されたガレンのイタリア語訳のほかに、次のものがある。

Lorenzo Valla : *On Free Will to Garsia, Bishop of Lerida*, Translated by Charles Edward Trinkaus, Jr., in *The Renaissance Philosophy of Man*, edited by E. Cassirer et al., Chicago & London, 1948.

Lorenzo Valla : *Dialogo intorno al Libero Arbitrio*, in *Scritti Filosofici e Religiosi*, Introduzione, traduzione e note a cura di Giorgio Radetti, Firenze, 1953.

25) ペトロ「第一の手紙」5章, 5節. — トリンカウスの注.